

真宗安心の現代的解明

——親鸞の回心について——

藤田 恭爾

「回心^{ニジ}」という宗教的経験についての考究は大別すると「心理学的方向」と「宗教哲学的方向」の二様がある。この二方向の扱いを窺い、親鸞の「回心」の意味と時期とを明らかにしたいと思う。

先ず、心理学的方向より見ると宗教的経験は宗教感情と見做され、日常的一般の感情的推移の一環として位置付けられ、しかも極端な感情の高揚として把握されている。今、親鸞の回心を心理学的に扱つた一例として、岡道固教授の論文があるが、これを中心にして論を運びたい。岡教授によると、親鸞の回心は少なくとも四回あつたと指摘されている。

即ち前三回は、「三願転入」が当り、第三回の「選択本願」への転入以後に第四回目の「真実弘願」への転入があつたとされている。これらの転入の各々に、ジェイムスの「意識下潜伏説」を応用して、第四回目の場合には「越後流罪」と「結婚生活」との特殊な二要因を通して、四十歳前後に第四回目の転入が為されたとされる。又四十歳前後という「時期」の設定は、承元元年親鸞三十五歳の流罪の時期を上限と定め、建保二年親鸞四十二歳の折の「三部經千部読誦の発願」を下限としその間に「真実弘願」への第四回目の転入があつたとされている。この論に対する疑問点を以下に示した

く思う。

一、親鸞独自の第十八願観が成立した時点を三十五歳から四十二歳までと定めているが、これを決定する歴史的事実は見出し得ないのではないか。

二、一応それまでに回心があつたとしても、四十二歳の折の「千部読誦の件にも心理学的に回心が語られねばならず、寛喜三年親鸞五十九歳の「大経読誦」の件にも回心が語られなくてはならないであろう。こうなると回心は無数に指摘されることとなる。

三、心理学の回心の意味内容が確固とした心理的狀態を示すならば、例えば、親鸞八十六歳の折の『悲歎述懐和讃』は未だ完全なる回心は成就されていないと云わねばならないであろう。

しかしながら、『教行信証』後序、『高僧和讃』、『恵信尼文書』、『歎異抄』等に表示されている法然への「絶対帰順」の表白に対比しつつ考えれば、是の如く回心が無数にあつたと見做すことは少々無理を感じる。心理学では、回心を日常的感情の範囲で扱い、量的なものとして把握している。しかし、宗教には単なる日常的感情とは位置を異にした独自の次元が存するのではないであろうか。ここに至つて次に宗教哲学的位層から回心をより明らかにしてみたい。

宗教哲学に於ては、回心と日常的経験との異質性を重視し、一回性を強調する即ち感情の極度の高揚として、計量的に扱う傾向のある心理学とは对象的に、質的に扱う方向にあつて、回心の成立要因を「他者性」「拒否性」「主体性」の三点を挙げ、その一回性と異質性を強調する。「他者性」とは日常的自己の在り方が人格性を超越した他者によつて破られる境地を指し、そこに於てはじめて自己の根源が異質なる他者によつて顕わにせられ、そこに本来的自己が

現出するかく現ぜしめ、生ぜしめる能動的はたらきを他者性と示す。「拒否性」とは日常的無意識の自己がある瞬間ある力によつてその日常性が根底から否定され、本来の自己に転換せしめられるが如き「拒否性」を示す。「主体性」とは「他者性」と「拒否性」とが互成し、現生し自己の根源に到達するそのもの、即ち「根源的主体性」とも名付けられるべき位置に於て語られる「主体性」を示す。以上の「他者性」「拒否性」「主体性」の三要素が根源的に綜合せられるところに「回心」を示さんとするのが宗教哲学に於ける回心の定義であり、一回性と異質性を強調することが知られる。

この宗教哲学の定義により、親鸞の回心の意味と時期とを次に見たいと思う。先ず拒否性については、二重の拒否性に気付く。第一には叡山下山の事実から窺つて「懷疑の拒否性」とも呼びうるものであり、自己の修行解脱への懷疑が明白となつた時点を指す。そして第二には親鸞の自己存在が法然の存在を透過しての「本願の現前」により、逡巡していた自己が、決定的に「自力無功」「必墮地獄」として体認せられ顕わになつた次元である。これは「決定的拒否性」とも云い得るであろう。この「懷疑の拒否性」から「決定的拒否性」への展開が二重の拒否性を孕んでいる。

次に他者性については、自己存在をその根底から照出し、覚醒せしめたはたらきであることから見做して、法然の存在を抜きにしては語り得ないであろう。法然を通して顕現した「他者性」としての「本願の現前」は「教行信証」後序、『恵信尼文書』『源空讃』等に表白する法然への「絶対帰順」の吐露となつて現われたのである。

次に主体性については、「決定的拒否性」と「絶対的他者性」とによつて成ぜられる本来の自己の原点の覚醒であり、「根源的主体

性」の体認である。

是の如く、三要素に分解して、親鸞に当てはめる時「回心」が現成した時点は建仁元年親鸞二十九歳の折であり、かかる境地の現前はまさしく質的一回性のものだと言ひ得る。それ以後の親鸞の自己把握は常にその「原点」への還帰の中に語られて見做さなくてはならない。

ここで、回心後の親鸞の足跡を如何に見做すかであるが、これを「バスのロゴス化」の方向に於いて説明付けたく思う。親鸞二十九歳建仁元年の「回心」は自己存在の根源がバスの（即自的）に「衝撃」として与えられ、「疑團」が突き破られた地平であつた。

その後、種々の日常的事象を媒体として、そのバスの（即自的）衝撃をロゴス化（対自化）し続けた過程が親鸞の「宗教的実存」であつたと思われる。自己の「原点」としての「本願の現前」によつて、その拒否性は「罪業深重」と表白される「機の深信」に於ける如く、「本質的存在性」にまでも対自化され、その他者性は「他力廻向義」としての「本質的救済性」にまでも至り、この二要因の互成である主体性は究極には「自然法爾」という宗教的実存の究竟に至るのである。是の如きロゴス化は対自化と伴に、對他化の「消息」の作成へとも歩を進めるのであり、親鸞の九十歳の生涯の全てに亘つてのこの真摯なるロゴス化の努力の軌跡は、忘れてはならないものを現代に与え続けていると云ひ得る。

1 『大原先生古稀記念浄土教思想研究』所収、「真宗信仰の心理学的管見」岡道国教授。

2 『宗教経験の基礎的構造』石津照肇著。

3 『根源的主体性の哲学』西谷啓治著。